



Data

監督：リック・ローマン・ウォー

出演：ジェラルド・バトラー／モーガン・フリーマン／ジェイダ・ピンケット＝スミス／ニック・ノルティ／ランス・レディック／ティム・ブレイク・ネルソン／パイパー・ペラーボ／ダニー・ヒューストン

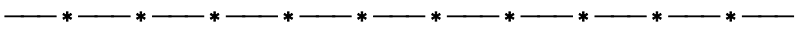
👁️👁️ みどころ

『エンド・オブ・ホワイトハウス』(13年)では、難攻不落のはずのホワイトハウスがあっさり陥落してしまう姿に驚かされたが、リンカーンやJ・F・ケネディと同じように、もし現職の米国大統領が暗殺されたら？

本作冒頭の、大量のドローンでの襲撃風景を見ていると、ロシアも中国も今や大陸間弾道ミサイルは不要。小型のドローンさえあれば・・・どうも、それが現実らしい。

しかし、そんな暗殺計画を仕掛けたのは一体だれ？それが最強のシークレット・サービスの主人公だとしたらそれは大ゴトだが、それはあり得ず、何者かの陰謀であることは明白だ。すると、その犯人は？そんなバカな？しかし、たしかにそれもあり・・・？

平和ボケの中、モリカケだ、桜を見る会だと騒ぐ日本では、こんな映画こそ必見！



■□シークレット・サービスを描く名作に注目！■□

大統領暗殺！それは一国だけでなく全世界を揺るがす重大事だが、特に銃社会のアメリカでは、リンカーン暗殺やジョン・F・ケネディ暗殺等、血塗られた大統領暗殺の歴史が多い。そのため『リンカーン』(12年) (『シネマ 30』20頁) や、『リンカーン／秘密の書』(12年) (『シネマ 29』未掲載) 等の『リンカーン』ものや『ダラスの熱い日』(73年)、『JFK』(91年) 等の『ケネディ』ものが大ヒットしている。もちろん、幕末から明治にかけて大転換を遂げた日本でも、坂本龍馬、中岡慎太郎、伊藤博文、そして大久保利通

ら多くのヒーローが暗殺されたし、彦根藩出身の大老・井伊直弼も桜田門外で暗殺されている。しかし、日本は今や銃砲刀剣類所持等取締法によって銃や刀の所持自体が禁止されているうえ、マスコミも国民もモリカケ問題や桜を見る会問題をはじめとする政治家のスキヤンドルの追及が大好きだから、「暗殺」等という物騒なテーマにはあまり関心を持っていない。しかし、アメリカは・・・？

アメリカには大統領を警護するシークレット・サービスというお仕事があるが、それが映画で脚光を浴びたのは、ケヴィン・コスナーが主演した『ボディガード』(92年)から。素晴らしい歌とともに大ヒットした同作を受けて、アメリカではその後『エンドゲーム 大統領最期の日』(06年)という物騒な映画まで作られた(『シネマ18』45頁)。その内容は、タイトルや通りのショッキングなものだし、主人公は大統領を守りきれなかったシークレット・サービスと女性記者だった。同作のうたい文句は「大統領暗殺とういセンセーショナルなオープニングから常識を打ち破る驚愕の結末へと突き進む」で「驚愕の結末」が最大のポイントだったが、やっぱり大統領が死んでしまうのは、ちとまずい・・・？

そんな反省(?)もあって、ジェラルド・バトラーが主演した『エンド・オブ・ホワイトハウス』(13年)『シネマ31』156頁)ではタイトルとは真逆の「ホワイトハウス」を救う素晴らしい「シークレット・サービスモノ」に仕上がっていた。その第2作、『エンド・オブ・キングダム』(16年)を私は観ていないが、シリーズ第3作の本作は、最強のシークレット・サービスたるジェラルド・バトラーが大統領暗殺計画の疑者にされるというものだ。『ハンターキラー 潜航せよ』(18年)『シネマ45』70頁)では、冷静沈着かつ豪胆な潜水艦の艦長としてロシア大統領の救出作戦を敢行したジェラルド・バトラーが、本作ではシークレット・サービスのエージェントであるマイク・バニングに扮して、モーガン・フリーマン扮するアラン・トランプル大統領の暗殺計画を?そんなバカな!それは最初からわかっているが、映画はあくまで作りもの。さあ、本作ではそれをいかに面白くかつ説得力を持って作り出すの?

■□■米国では民間軍事会社が次々と! その役割は? ■□■

政官財の癒着問題はどの国でも同じ。アメリカはそこに軍が大きく絡んでいる上、その予算規模は膨大だ。ベトナム戦争(への派遣)で多くの自国の若者の命を失ったアメリカは、今やその轍を踏まないために地上戦を避け、トマホーク巡航ミサイルでの空爆をメインにしている。また、必要不可欠な地上戦については、正規のアメリカ軍ではなく、民間軍事会社に委託するスタイルに移行している。すると、民間軍事会社に雇い入れる兵隊は必然的にアメリカ人ではなく、安く雇え、命を失っても問題の少ない外国人になってしまうらしい。なるほど、なるほど。

本作冒頭は、小さな山を購入し、古い設備を改造して民間の軍事会社サリエント社を経営しているマイクのかつての戦友ウェイド・ジェニングス(ダニー・ヒューストン)の姿

が登場する。このサリエント・セキュリティー訓練施設での実践さながらの訓練を終えたマイクは満足そうだが、このシークエンスの肝は、現在のアメリカの民間軍事会社の実態を見せつけることの他、そこでマイクがウェイドから大統領への口利きを頼まれること。もちろん、それは露骨な「買収」ではないが、この会話はマイクがトランプ大統領のシークレット・サービスとして絶大な信頼を得ていることを前提としてのものだから、もしマイクがサリエント社のCEOであるウェイドの言葉を「忖度」すれば・・・？

■□■今はこれが現実！自爆ドローン攻撃の威力にビックリ！■□■

『悪名』シリーズでは、朝吉役の勝新太郎とモートルの貞役の田宮二郎の凹凸コンビ体的にも性格的にも相性抜群だったが、『エンド・オブ』シリーズでは、最強のシークレット・サービスであるマイクとトランプ大統領の凹凸コンビ(?)の相性が抜群だ。本作では、冒頭の軍事訓練のシークエンスに続いて、プライベートタイムの中、湖で釣りを楽しむトランプ大統領の姿が登場する。その傍にはもちろんマイクが立っていたが、長年の激務と歴戦の負傷のため、近時、身体の不調に苦しんでいるマイクは、一方では次期シークレット・サービス長官の座に近づいていることを知りつつ、他方では引退の二文字が頭をよぎっていた。大相撲では、令和最初の九州場所で白鵬が43回目の優勝を飾ったが、彼も一方では2020年の東京五輪の開会式で“土俵入り”を務めることを狙いつつ、他方で引退を常に考えているはずだ。マイクは病院に通っていることやたくさんの薬を飲んでいることを妻にも隠していたから、当然それは大統領にも内緒だ。すると、2人きりのボートの上で、釣り糸を垂れた大統領から次期長官職を打診されると・・・？先にそう言われてしまうと、もはやマイクに、病気だから受けられませんと断る選択肢がなくなったのは当然だ。

そんな中、突然空からコウモリのような一団のドローンが襲ってきたから、・・・。今やこれが現実！何十台もの小型ドローンはたった一台のトラックからの発射が可能。しかも、その自爆ドローンはすべてコンピューターで制御されているから、目標を捕捉すれば外すことはありえないものだ。湖の外で警護していた大統領の警護チームは次々にドローンの餌食になったうえ、大統領が乗ったボートにもドローンが。とっさにマイクは大統領と共に湖の中に飛び込んだが、爆発したボートは2人の身体に対して如何に・・・？これは一体誰が？

2019年10月1日の中国建国70周年の過去最大級となる軍事パレードには、大陸間弾道ミサイル(ICBM)の「東風(DF)41」が初登場した。これは射程が推定1万2千~1万5千kmで、中国本土に展開する移動式発射台から米本土を攻撃できるもの。しかも、ミサイル1発に最大10発の核弾頭(個別誘導複数目標弾頭)を搭載でき、迎撃が非常に困難なタイプだからその威力は絶大だ。しかしこのシークエンスを見ると、大統領を殺すのにはこんな大陸間弾道ミサイルは不要。小型ドローンとコンピューターさえあ

ればよい。どうも、今やそんな時代になっているようだ。

■□■マイクにロシア疑惑が！1000万ドルのために彼は？■□■

フランツ・カフカの小説『変身』では、主人公が目覚めると自分が巨大な毒虫になっていたからビックリ。ところが本作では、マイクが昏睡状態から目覚めると、ベッドの上で手錠に繋がれており、大統領暗殺犯としてFBIのヘレン・トンプソン捜査官（ジェイダ・ピンケット＝スミス）の取り調べを受ける羽目になっていたからビックリ！「俺はハメられたんだ」といくら弁解しても、大統領とマイク以外の警備員のすべてが死亡しているうえ、マイクの口座にはロシアから1000万ドルが振り込まれる等、あらゆる物的証拠がマイク犯人説を示していたから、ヘレンがマイクの弁解を聞くはずがない。もちろん、厳しくかつ詳細な尋問はこれからだが、百戦錬磨のシークレット・サービスたるマイクには、これほど周到に仕組まれた状況下ではいかなる弁解をしても逃れられないことはすぐにわかったらしい。すると、そこでマイクが目指すのはただ逃走すること。そして、自らの手で真犯人を暴き出すことだ。そう悟ったマイクは・・・？

現実問題としてあんな風到手錠で繋がれた状態から脱出するのは不可能。しかし、映画は所詮つくりものだから、そこはどのようにでもできる。派手なパフォーマンスで病院を抜け出し、車を奪い、心配している妻レア・バニング（パイパー・ペラーゴ）を安心させるべく、盗聴されていることを覚悟の上で電話を掛けると、また車を奪って逃走。その後は電話した場所を特定し、マイクを逮捕するべくやってきた捜査陣とのド派手なカーチェイスが展開されるのは予想どおりだが、追いつめられ、大破された車から脱出し、包囲網からも脱出したマイクが向かった先は？

■□■怪しげなじいさんは？副大統領は？■□■

マイクが人里離れた山の中で出会ったのは、毛糸の帽子をかぶり、髭を伸ばし、ライフルを構えた一人のじいさん。ところが、何とこれは、幼い頃のマイクを母親もろとも捨てて失踪してしまった実の父親クレイ・バニング（ニック・ノルティ）だったから、ビックリだ。ある体験から世間をバツサリ切り捨てて隠遁生活を送っていたクレイだが、今、目の前で起きている事態の理解ははっきりできていたらしい。そのため、クレイが追われる息子を救出しようとしたのは当然だが、本作ではその手際の良さにビックリ。いくら映画は作りものだといっても、これはちょっとやりすぎだが、そこで面白いのは、マイクを殺すべく山の中にあるクレイの家を襲撃してきたのはFBIではなく、ウェイド配下の武装集団だったこと。アレレ、これは一体なぜ？かつての戦友だったウェイドはマイクと固い絆で結ばれていたのでは・・・？

他方、『LBJ ケネディの意志を継いだ男』（16年）では、ケネディ大統領が暗殺された後わずか98分で権力の承継がなされる姿が印象的だった（『シネマ43』50頁）が、ト

ランブル大統領の昏睡状態が続く本作では、いつ権力の承継を？その判断が難しいのは当然だが、権力の空白が長時間続くのはマズい。しかして、カービー副大統領（ティム・ブレイク・ネルソン）が周囲の納得の中で大統領職を承継したのは当然だ。しかし、ジョンソンがケネディの路線をそのまま引き継いだのと正反対に、本作ではカービー大統領はトランプ大統領の対ロシア政策や民間軍事会社の位置づけを即座に大きく見直したからアレ。つまり、カービー大統領は民間軍事会社を大いに活用しようとする考えだったから、ウェイドは大喜び。もっとも、これは単なる偶然？それとも、ひょっとして・・・？

■□■俺をハメたのは誰？大統領を救うには？■□■

コトここに至って、マイクには「俺をハメたのは誰？」がはっきりわかったはず。そこで、マイクは電話で大胆にも直接ウェイドに「俺を探さなくていい、こっちから見つけてやる」と宣言したから、いよいよ映画はクライマックスに向かうことに。

他方、本作ではマイクの優秀さに比して、FBIの優秀な捜査官であるはずのヘレンの「後手、後手ぶり」が目立つ。しかし、それはマイクの優秀さをより目立たせるための演出だから仕方ない。そんな風に、何かとドン臭いFBIだが、やっと今回の大統領暗殺事件に民間軍事会社を営むウェイドが絡んでいることが把握できたらしい。そこでヘレンは部下と2人だけでヘリに乗って山の中にあるウェイドの軍事訓練施設に乗り込み、「FBIだ！」と啖呵を切ったが、そこであっさり撃たれてしまったからアレ・・・。どうやら、ウェイドにとってこの軍事施設はもはや不要となり、今後は堂々とロシアと組んで新たな施設に拠点を移すらしい。つまり、ここでもFBIは後手を踏んだわけだが、さてロシアに拠点を移すウェイドが最後にやり残した仕事とは？

それは、今なお昏睡状態にあるものの覚醒間近にあるトランプ大統領の抹殺だ。しかし、病院の集中治療室に入り、デビッド・ジェントリー（ランス・レディック）たち精鋭のシークレット・サービスが警護しているトランプ大統領を、ウェイドはどうやって襲撃するの？逆に、今やそんなウェイドの狙いをハッキリ悟っているマイクは、FBIから追われている立場ながら、如何にしてトランプ大統領を救出するの？そんなクライマックスに向かってスクリーン上は一気に動き出すことに・・・。

■□■最後はナイフ！これが男の美学！？■□■

本作は『エンド・オブ』シリーズらしく、民間軍事会社をテーマとしながら、大統領暗殺未遂事件を描く脚本はよくできている。その黒幕として副大統領を登場させたのも、あっと驚くグッド・アイデアだ。しかし、いくら物的証拠が揃っていても、天下のFBI（？）が犯人をマイクだと決めつけてしまう脚本は少しいただけない。「証拠があまりにも揃いすぎているのは逆に怪しい」とか、「もしこれが仕組まれた罠だったら、それによって最も利益を受けるのは誰？」等の検討がされないのもお粗末だ。さらに、やっとそこに気づいた

後、FBIの責任者ヘレンがアッサリ殺されてしまうのもいただけない。

しかして、やっと昏睡状態から覚めたトランブル大統領をマイクがウェイドの手から救出すべく向かったのは、その病院。そこでは、デビッドたちが大統領を警護しつつ、マイクが姿を見せたら即逮捕すべく身構えていた。しかし、やっとの思いで警護の隙を突き、拘束されながらトランブル大統領の前に姿を見せたマイクの最大の理解者は、同僚のデビッドではなく、今でもトランブル大統領だった。そのため、ここからは大統領の「鶴の一声」でマイクが警備責任者に任命され、マイクの指揮の下、大統領の命を守るべくウェイドの攻撃に立ち向かうことになる。つまり、数多くの物的証拠より、また、FBIの組織を挙げての捜査より、大統領とマイクの間で「俺の目を見ろ、何も言うな」というナニワ節的な男の友情、信頼の方が優先したし、その方が正しかったということだ。

以上を受けて、本作ラストは、再度の大統領暗殺に失敗し、ヘリでの脱出を図ろうとするウェイドと、それを追い、最終のケリをつけようというマイクとの直接対決になる。それは予想通りだが、そこでウェイドを追い詰めたマイクがあえてマシンガン捨て、2人の肉弾相打ち格闘戦になるのが最後のミソだ。やはり、男の最後の戦いはこうでなくちゃ！ どうも、それがかつての戦友だった2人の男の美学らしい。しかも、最後の決着はナイフで！なるほど、なるほど。

これにて、一件落着。ここでマイクはやっと心置きなくシークレット・サービスの第一線を退くとともに、その長官職も辞退して、余生を安泰に・・・？誰もがそう思うはずだが、本作の結末は意外にも・・・？なるほど、こうなると、近い将来『エンド・オブ』シリーズの第4作が始動することに・・・。

2019（令和元）年11月28日記